横顔

詠人白子

ヒマワリとカミカゼ

まじめに黒板を見つめる、あなたの横顔が綺麗だ。

隣の席に腰を据えて、真剣にノートをとっている彼女の、シャツの袖から伸びたなめらかな肌色を辿る。細い指がシャープペンシルを握って、何か書いていた。ふとそこから視線を上げると、薄く色づいたくちびると光を吸い込んだ瞳がある。授業中だけかけている彼女の眼鏡がすこし邪魔だけど。黒縁の向こうに、確かにある。

エアコンから吹き出る涼風が、私のふくらはぎをくすぐった。膝丈より少し下で揃えた襞がゆれる。同じ丈の彼女も、同じことを考えていたりするのだろうか。進まないペンを握るわたしの手のひらが汗ばんだ。いやな汗だ。汚い。

彼女、井上あかりは、とても綺麗なおんなだ。燻っている感情がいやになるほど、まばゆいおんなだ。太陽を背景にして真剣に授業を受けているときも、眠たそうにあくびを噛み殺しているときも、横顔が美しかった。換気として開いていた窓から吹く風が、濡れ烏の黒羽を乱しても。もちろん正面だろうが後姿だろうが、どんな姿を捉えても美しいはずだが、授業中にこっそり見る横顔は特別であった。ルノワールあたりに彼女を見せたら、すぐさまカンヴァスを取り出すだろう。クレオパトラ七世も楊貴妃も小野小町も、彼女の前では尻尾を巻いて逃げ出すに決まっている。授業の始めから終わりまで眺めていても飽きないほど、特別であった。

桜の季節に巡り会った彼女は、はなびらの中で女神さまみたいだった。とっくのとうに桜は枯れ新緑に衣替えしたにもかかわらず、女神は相変わらずそこにいて、長袖から半袖に変わっていて、わたしの頭のてっぺんからつま先までを奪って知らん顔している。

「……ちゃん、なっちゃん」

彼女に名前を呼ばれるとくすぐったい。

「なっちゃん、授業終わったよ」

「え？」

黒板の上の時計を見やると、授業終了時刻を指していた。どうやら本当にずっと眺めてしまっていたらしい。

「課題出てたけど、ちゃんと聞いてた？」

「課題？　え、なに、それ」

「やっぱり聞いてなかった」

差し出されたノートに書かれたメモ書きを見ると、一週間後の日付とともに課題の内容が書かれていた。慌ててメモを写す私に、彼女が呆れたように笑う。すぐそばにいる彼女から香る、制汗剤の爽やかなにおい。

「窓の方見てるなあとは思ってたけどさ、先生の話くらいちゃんと聞きなって」

見ていたのは窓なんかじゃないけれど。

「ありがとう、いのちゃん」

「またそのあだ名。皆あかりって呼ぶのに」

慣れたけど、と笑う彼女は何も気にしていないが、井上あかりのことを『いのちゃん』と呼んでいるのは、彼女の過去にも現在にもわたしだけだ。

皆と同じように名前を呼んだら、ただのクラスメイトに埋もれてしまう。呼び続けているあだ名はわたしの小さな抵抗心。痛くもかゆくもなんともない抵抗心。

授業開始のチャイムが鳴り響いて、また黒板に向き直る。太陽の光を浴びる数十センチ先の彼女は女神だ。

×××とアラスカ

真夜中にベッドに潜り込んでいると、世界にひとりの気分になる。時間を確認すると日付が変わって一時間ほ

どだった。胎児のように身体を縮める。
身体がじっとりと汗をかいていた。歪な骨組みに肉がついただけの不完全体が、わたしに重くまとわりついている。身軽になりたい。完全体になりたい。本当は、普通になりたい。普通になるには、わたしより大きな体と低い声を持つ者を求めなければいけない。
目を閉じると隣の席が思い浮かぶ。白いカーテンが靡いて、彼女の細い肢体にまとわりついてゆく。視線を流すようにこちらに向けて、白い小さな手を伸ばす。わたしにではない、わたしの目の前にある果実に。
はちきれんばかりに膨れた真赤な実に、彼女の指が近づく。やめて。声が出ない。やめて、さわらないで。
「なっちゃん」
カーテンが口元だけを切り取る。
「私たち、ずっと友達だよね？」
唇に笑みを浮かべて、彼女が果実を爪弾く。
痛いほどふくらんだ赤い実には杭がない。モビーディックがない。どうしようもない。神様がなにかを間違えたのか。わたしがなにかを間違えたのか。握りしめたシーツは、白いはずなのにひどく汚れて見える。懺悔をして誰かに赦されたい、仕方がないのだと認めてほしい。今のわたしには彼女に向けて指を組むしかできないし、この懺悔はどこにも届いていない。
彼女の髪が靡くから、睫毛が瞳に影を落とすから、くちびるがやわらかくゆがむから、シャツに包まれた曲線が豊かにたわむから、制汗剤が香るから、つややかな脚が自由に伸びるから、上靴のくつひもをきっちりと締めているから、心臓が血液を送り出すから、息を吸ったら吐くから、わたしはその度に何度も指を組み直す。
出会った時の桜のはなびらは、白いカーテンに姿を変えてもわたしを縛りつけている。桜越しの彼女と、カーテンを挟んだ彼女は、寸分の狂いなく一致していた。
このまま大人になって、例えばお酒を飲めるようになって、そのときわたしはベッドで懺悔をしているのだろうか。彼女はカーテンを纏っているのだろうか。わたしはあと何回この夜を繰り返すのだろうか。彼女はあと何回現れてくれるのだろうか。
外はまだ暗いままだ。はやく夢が見たい。

シオンとウイスキーフロート

お酒は大人のものだって憧れを、捨てたのはいつだったか。公園で飽きずにいつまでも遊べたはずなのに、会うと言えば居酒屋になったのはいつだったか。大学生もこなれてくると、いろいろなことを忘れていく。
「なっちゃん、グラス減ってなくない？」
赤らんだ顔はチークと混ざって色濃い。半分以上残ったグラスが汗をかいている私と違って、彼女はいくつものグラスを空けていく。
「お酒あんまり慣れてないから」
「なっちゃんは成人するまで飲まなかったもんねえ」
高校を卒業してすぐアルコールに手を出した彼女は、会うたびにグラスの数を数段飛ばしで増やしていた。丁寧に塗られた赤色を、容易くグラスで濡らす。
ふと向いた横顔は睫毛がしっかり上がっていて、目蓋と目の下を赤みのある桃色がきらきらと主張していた。
「あー、はやく彼氏欲しいよお」
「またその話。いのちゃん飽きないね」
「だって全然できないんだもん」
机に突っ伏した彼女から香る、知らない香水の匂い。
「バイト先の人も、同じ学部の子も、皆仲が良いってだけだしさ……」
人懐っこくて距離が近い彼女は、性別関係なく人を惹きつける。仲の良さを隠れ蓑にしてピストルを持っている獣はきっといるのだろう。これ友達、と次々横にスライドされていく写真はどれもべったりくっついていた。肩を組んで、頬を寄せて、次を見るのが怖いほど。
「彼氏できたら、一番になっちゃんに教えるね」
「ありがとう」
「なっちゃんも、彼氏できたら教えてよ。友達なんだから、一番にお祝いする」
期待に満ちた目が、こちらをまっすぐ見つめる。ぱっちりとした丸い瞳は、きっともう授業中でも眼鏡をかけない。ふちがぼやけた十四・二ミリのブラウンの瞳。
「うん。できたらね」
「やったあ！　約束だよ」
果たせる頃には来世になっていそうだ。
小首を傾げると鎖骨のあたりで揺れるかわいい毛先。何色だっけ、ミルクティーベージュだったっけ、おいしそうな色だ。安い照明の光をたっぷり浴びているつむじのあたりは結構明るい。覗く耳朶にいつからか開いていた穴と、細長いピアス。皺ひとつないブラウスの袖から伸びる爪先には、瞬く星が散っていた。絞られた腰から下をスカートが隠し、すらりと脚を長く見せている。
「ピアス新しいやつでしょ、似合うね」
彼女の細長い指がみずから耳に触れて、目を細めた。
「気づいてくれるかなって期待してたんだ」
やっぱこういうの女子の方が気づくよね。嬉しそうに微笑む彼女と、制服姿の黒髪がだぶった。瞬きすると、霞んで消えていく。

勢いよくグラスを傾けて、店員を呼ぶブザーを響かせる。眩しい照明の下で笑う華美な彼女は女神だ。

アングレカムとギムレット

高校のクラス会と称して毎年行っている飲み会に、彼女は今年も参加していた。胸元まである艶のない黒髪を垂らしながら、わずかにグラスを傾けている。シンプルな七分丈から覗く肌、その先に伸びるサーモンピンクの爪。耳朶には何もぶら下がっておらず、黒色の隙間からちらちらと見えるばかりであった。

「いのちゃん」

「ん？」

「なんか雰囲気変わったね」

彼女が口先だけで笑って見せる。ねえ、いつからそんな、適当な笑顔が得意になったの。

「なっちゃんはすぐ気がつくね」

容易く隣に潜り込まれた。控えめなピンクブラウンで濡れた目蓋。すぐ傍で擦れる布地から、煙の匂い。

所在なく握りしめていた携帯が震えた。隣にいる彼女のアイコンがこちらを見ている。

外に行こう、と。それだけ。

酔いを醒ますとか適当に理由をつけて、店の引き戸をやや思い切って開けた。酒の所為で心拍数が上がる。酒の所為で顔が熱い。グラスを半分も減らしていないことは都合よく忘れてしまえばいい。酒の所為だから。

「ごめんね、急に」

当たり前のようにポケットから小さな箱を取り出す。暗がりでよく見えないけれど、灯る炎と煙で察した。

「ハイライトだよ」

慣れてきた視界に、見たことのある白と水色の外装が揺れている。カタカタとぶつかる音は軽くて大きい。

「煙草吸うんだね」

「うん」

「いつから？」

「うん、まあ」

煙を吐き出しながら彼女がまた笑った。口紅が白いフィルターを汚してゆく。布地から香るあの匂いがする。

「最初はね、辛いだけだったの。二度と吸うもんかって思ったんだけど……何回か吸ううちに慣れちゃった」

隣同士並んだわたしの方の手に、携帯灰皿がある。

「ずるいよね。教えたくせにいなくなるなんて」

この煙草コンビニでもスーパーでも見るんだよ。

赤く濡れた煙草から、名残が細くたなびいていた。べったりとした黒髪が看板の光を浴びてわずかに煌めく。

「最後の人だと思ってたのに」

ため息とともに彼女の唇から白い煙が吐き出される。最後だと信じられるほどの男だったのだろうか。自分の姿を変えてしまってもよいと思えるほどの男だったのだろうか。隣にいるはずなのに、彼女が遠い。

「……はやくやめたいなあ」

彼女はそれ以上何も言わなかったし、私も何も言えなかった。ただ深く口づけて縋る彼女を、一本ぶん見つめることしかできなかった。わたしの服にも匂いがついていそうだ。

黒髪に外れたピアスとピンクブラウン、ピンクの爪に飾り気のない服装。おまけのハイライト。薄れた口紅から舌が覗く。彼女はラム酒の香りを携えて微笑んだ。

「戻ろっか」

消された火と消えない匂い。逃れるように戸口を開けると、隣の彼女が眩しそうに目を細めた。知らない匂いに溺れていても、天使の輪が消えていても、光を浴びる彼女は女神だ。

ジンジャーとボンベイ

『夜遅くにごめんね！　今から行ってもいい？』

彼女からそんなメッセージを受け取って、肌が期待にざわめいた。なんてことないふりをして、駅まで迎えに行こうかと返す。既読がつかない。壁掛け時計を確認すると終電ぎりぎりの時間だ。既読がつかない。部屋の中をうろついて、ソファに座る。やっと既読がついた。

『前行ったから大丈夫！　ありがとう！』

丸っこい犬と猫が感謝を述べるスタンプが付け足されて、彼女らしいと頬が緩んだ。エクスクラメーションマークの多用は高校の頃から変わっていない。

部屋を見渡して、そんなに散らかってもいないがざっと片付ける。机を拭いて、読みかけの本を棚に帰して、ルームフレグランスまで取り換えた。寝室の方に目をやって、逡巡した後に一応ベッドを整える。寝るかもしれないし。二人でとかでは断じてなくて、彼女ひとりで。

『着きました』

軽快な通知音が心臓を締め上げた。随分早くないか。

「やっほー、ごめんね急に」

玄関の扉を開けると、力なく右手を振る彼女が笑っていた。顔を赤くして、唇の色がとれかかっている。お酒の匂いがした。部屋に招き入れると一層強くなる。

「呑んでたらなっちゃんに会いたくなっちゃった」
仕事場と往復するだけのわたしの部屋が、彼女の存在で天国に見える。はしゃぐ彼女の靴をそろえて、お茶の準備をした。呑んでいたのなら早く休んだ方がいい。氷をグラスに二つ放り込んで、キッチンから彼女を探す。ソファにしなだれかかっているところを見つけて、だいぶ潰れていることを察した。
「お茶？　ありがとう」
「いえいえ。結構呑んだんでしょ」
大学生の頃みたいに彼女がグラスを次々空けることはなくなったが、その代わりに度数が上がっていった。お酒と一緒に何かを流し込むように、アルコールで誤魔化すように。
半分ほど減ったグラスを机に置いた彼女が、私を見つめる。胸元の乾いた黒い毛先が力なく揺れていた。
「なっちゃんは、私の友達だよね」
「なに急に」
細められた瞳をモーヴピンクが彩っている。見透かされている気がして、思わず視線を逸らした。
「いのちゃんと私は友達だよ」
当たり前のこと聞かないでよ、と絞り出すと、満足そうに彼女がほほ笑んだ。私は彼女の友達だ。胸を張って言うことができる。でも、わたしは。
「そうだよね、なっちゃんは友達だもんね。なに聞いてるんだろ、私」
「酔ってるんでしょ。休んだ方がいいよ」
「んん」
いやいやと首を振って、唇に笑みを浮かべながら、彼女の手がその美しい眼を覆った。
「置いていかないでね、私のこと一人にしないでよ」
懇願するように呟かれてもどうすればいいのかわからない。手を上げたり下げたりしていると、彼女が息を吐く音がうるさく聞こえた。ミモレ丈のスカートから伸びる脚が、頼りなく彼女を隠す手が、細かく震えている。
「……急にごめん。酔ってるのかも」
「あ、っと……そ、うかもね」
「やっぱり寝た方がいいかな。ここ使ってもいい？」
返事を待たないで彼女は力を抜いた。ソファに丸まってさっさと眠りにつく姿に、声より毛布をかけるべきだと寝室に向かうことにする。ラックから白い毛布を取り出して、やっぱり黒い毛布に変えた。
「ごめんなっちゃん、スマホとってくれないかな」
「ん、いいよ。どこにあるの？」
「鞄の中。漁っていいよ」
ためらったが言われた通りにすると、確かにスマートフォンがいた。整頓された鞄の中には、文庫本が一冊存在を主張している。
「はい」
「ありがと」
「ううん。……本読んでるんだね」
「ああそれ？　借りてるんだ」
本の貸し借りって世界の共有って感じだよね。アラームの設定を行いながら、彼女は誰に言うともなく呟く。
眩暈がした。置いていかないでと言ってのけた彼女は当たり前のように誰かと生きている。私に頼るくせに、わたしのことは簡単に突き放す。高校の頃は本なんて全く読まなかったのに。誰の影響だかも知らないけれど、彼女は易々と変化していく。わたしはいつまでも私のまま、何も変わることができない。
規則的な吐息が聞こえて、ため息をついて部屋の電気を消した。静かな暗闇で黒い毛布に包まれている彼女は女神だ。

シダレヤナギとカリフォルニアレモネード

話があるんだ、と彼女に告げられて、呼び出されたのは小さな喫茶店だった。奥のソファ席で縮こまって、適当に頼んだアイスコーヒーで唇を湿らせる。彼女は頼んだコーヒーを一口飲んで、柔らかくはにかんだ。
「あれ、コーヒー飲めたんだっけ」
「最近だよ。飲んでるうちに慣れちゃった」
手入れされたこげ茶の髪が顎のあたりで揺れる。久しぶりに会った彼女は、あの日の光をたたえた黒髪とも、明るく目立っていたミルクティーベージュとも、沈んだ黒髪とも違っていた。煙の匂いも感じない。
「なっちゃんには一番に言おうと思ってたんだけど」
丸く整えられた爪先が、眩しく光る白い紙をなぞる。
「私ね」
わたしの首にその小さな手をかける。
「来年、結婚するんだ」
死刑宣告だ。
友人代表のスピーチをお願いしたいの、と続ける声が急に遠く感じた。喉がぐっと締め付けられて、ただひたすらに喉が渇く。私を見据えるはっきりとしたふちどりの黒目。
「いい人いたんだね。どんな人？」
「んっとねー……本とコーヒーが好きな人」

だろうな。なぜだか納得してしまう。彼女はすぐに影響を受けて、わたしの知らない姿になるから。
「他の皆には招待状送ってるんだ。でも、なっちゃんには直接言いたくて。彼氏できたら一番に言うって約束してたのに破っちゃったから、それで」
「気にしてないよ、そんなの。でもありがとう」
よくしゃべる彼女は安心したように唇をゆるめた。私が気にしていると思っていたのだろうか。確かに知らない場所で知らない人の影響を受けている彼女から、明確に男の存在を聞いたことはなかった。ただそれを気にしたことも、約束を破ったと感じたこともない。むしろそんなに知らない影からべたべたと影響を受ける姿も隠してほしかったくらいだ。
「……おめでとう、いのちゃん」
手繰り寄せた平静でなんとか自分の口角を上げると、彼女はやさしく首を振った。
「あかりって呼んでよ、もう井上じゃなくなるんだよ」
アイスコーヒーでいっぱいのグラスが、机に涙を落としている。コーヒーの匂いがあたりに漂っていた。結露で濡れる窓から差し込む日光を浴びる彼女は何だろう。

ホオズキと×××

夢を見た。白いウェディングドレスを着て笑う彼女がいた。こちらに手を伸ばして、喉仏のないわたしの喉をとらえてなぞる。ベールで顔が隠されて、彼女の様子が窺えない。今どんな顔で、誰を見ているのだろう。
彼女の声がする。
少しだけ背伸びをしたような声。確かめるような声。俯くしかなかった。わたしにはなにもできないから、懺悔も許されない教会で、頭を垂れるしかなかった。目の前の彼女が纏う白はもうカーテンではない。
そんな夢を見た。そうだ、私は夢を見た。

スカビオサとゴールデンキャデラック

春が来れば桜が咲く。風が吹けばカーテンが靡く。
トーク画面の下の方に埋もれたアイコンが、見知らぬものに変わっていた。小さな子どもを抱きかかえるこげ茶のショートボブ。コンビニエンスストアのこうこうとした光の下で、そっと画面を暗くする。子どもができたなんて、知らなかった。彼女が偽物の純白を身に纏ったあの日から数年も経てば、当たり前のように変わってゆく。もう制服の面影を見ることはないのだろう。
適当にとったミネラルウォーターのボトルが、外気に負けて手のひらを濡らす。早く会計を済ませて出てしまおう。レジの列に並ぶと、店員の後ろにずらりと並んでいる小さな箱が目に入った。
「あの、ハイライトひとつ」
「番号で教えていただいてもよろしいでしょうか」
「あ、ごめんなさい、ええっと……」
まごつきながらなんとか番号を告げると、手慣れた様子で白と水色の箱がレジに置かれた。
「年齢確認のご協力お願いいたします」
「はい」
買うのは初めてだ。画面上のボタンをタップすると、ふっとラム酒の匂いがした。もう誰からも香らないあの匂い。
「ありがとうございます」
さっさと次の会計に移った店員に頭を下げて、レジ袋から手探りで角を探す。手にぶつかったものを引き上げると、暗がりで見た記憶とそっくり同じの外装だ。たぶん本当はライターも買うべきなのだろう。でもいい。
鼻先にあてがうと、わずかに匂いがする。いい匂いなのかはよくわからないし、そもそも外装越しだから薄いのだけれど、開けてしまったらたまらなくなる気がしてためらった。
本当だ。ずるい、ずるいね。
鞄に仕舞い込んで家路を急ぐ。レジ袋に残ったペットボトルが身体に何度もぶつかった。私はあの日から、一滴もコーヒーを飲んでいない。
浮かぶのは彼女に似た小さな子ども。到底見られない彼女のみずみずしい笑顔。数年前のトーク画面。通り過ぎた果樹から、熟れすぎた果実がべしゃりと落ちる。所々茶色に変色した深紅の皮の隙間を縫うように、蜜があふれてアスファルトを汚した。芳しい、とは言えない鼻につくにおい。
「気持ち悪い」
知らず口から言葉が零れる。気持ち悪い、ともう一度呟くと、においが一層強まった気がした。
お前もわたしも仲間だから。